

## 能登半島の風土と植生

—— 風景論への一つのアプローチ ——

“Fudo” and “Vegetation” in the NOTO peninsula <sup>1)</sup>

— An approach to Scenery's thought —

市川 秀和

(福井大学工学部)

### 要 旨

近年、人文学系や理工学系の幅広い学術分野から論じられている「風景論」が、ここでの主題である。多義的で多次元な「風景」の現象の究明をめざした第一報として、本稿では、建築論の立場に基本的に拠りながら、まずは「風土」・「植生」と人間とのかかわりあいから現われる空間構造としての「生きられた風景（海辺の風景・木立の風景）」に着目し、そこに見い出される「風景なるもの」の一性格を「風景の品格」として捉え、それがわれわれ人間にとってどのような意味を持つのかを考察する。そこで具体的な論究の対象として、日本海沿岸諸地域のほぼ中心部に位置する〈能登半島〉が設定された。

### 1. はじめに

現代の高度に発達した情報管理社会に生きる我々人間の均質化された生活環境に、物理的にも精神的にも、やさしく潤いのある生きた空間の創造・構築をめざして、さまざまな分野、立場から研究・実践が試みられている。それは個々の限られた建築空間から、さらに都市レベルや地域・国土レベルにわたる多様な対象領域において具体的にみることができる。それを例えば建築学・都市工学・土木工学から見ると、地域の風土性を取り込んだ共生住宅や歴史的建造物の保存再生と街並みの整備、さらに建築・都市基盤施設一般の充実、都市と周辺環境との一体整備、自然との共生に根ざした土木技術の確立・促進など、その遂行すべき課題は実に多様であることが知られる。さらにそれらと相俟って、その確かな指針・道標となる新しい概念（キーワード）の構築が思索されている。

ここでテーマとする「風景」あるいは「景観」などという概念が、近年殊に頻繁に取り上げられるのも、以上ような現代の動向の一端を反映してのことであろう。しかし我々が日常的に使いもする「風景」というこの身近な言葉は、果たして如何なるものなのであろうか。我々はおそらく、ある一定の認識で以て「風景」を理解し共有しているのであろうが、一度立ち止まって「風景」という言葉がいったい現実は何を指しているのかと改めて問うとき、その答えは曖昧なままに済まされているのではなかろうか。つまり我々は、この「風景」という言葉を知っているようでいながら、実は何も知らないのである。こうした事実とともに、さらに分野を越えて「風景論」という主題の下にさまざまな切り口から論考されているという現状からも、「風景」とは、多義的な意味を包摂し得る何か捉え処のない性格をもったものであることが予想されるのである。さらにいま一度、現代日本の雑居で殺伐とした諸都市のもつ空間構造を振り返るとき、建築・都市設計の根本的な理念なり思想の必要性が急務であると考えられるのである。そこでこのような問題意識から本

(キーワード：風景論、風景の品格、風土、植生、能登半島)

Hidekazu ICHIKAWA (Faculty of Engineering, Fukui University)



稿では、日常的に曖昧なままにされながらも、現代の建築や都市の環境を改めて考えるのに重要と思われる「風景」、あるいはその本質としての「風景なるもの」の一面が主題化されるわけである。

よって本稿は、サブタイトルに明記されたように、風景論へ向けての一つの見方を提示する試みとして論述されるものであり、あくまでも試論としての報告である<sup>2)</sup>。さらにここで目指される風景論とは、近代建築思想において確立された空間論の成果から発展してきた、現代の場所論の問題と原理的に深く通じるものでもある<sup>3)</sup>。またこうした特定の立場から発する「風景」あるいは「風景なるもの」への問いとは、人間と建築、自然、世界の存在論的な基礎構造を解明する「建築論」の射程とも重なるものである。従って以下に、一地域の固有な場所性が読み取れる「風土」・「植生」から捉えた「生きられる風景」を考察する。そこで考察する具体的な対象地域には、日本海沿岸の独特な風景の原型を求めることも考慮に入れて、北陸地域のとりわけ能登半島が取り上げられることになる。

## 2. 能登半島の風景

### 2.-1) 歴史がつくった風景<sup>4)</sup>

宇宙衛生が撮らえたところの下図にまずここで注目すると、大陸に押し出されたごとく扇状に拡がる日本海は、怒濤に高波を打ちたてながら自然の厳しさを見せつつも、日本列島の描く弓状のやさしい曲線に温かく包まれ護られているように見えてくるのである。また日本海のほぼ中央部にむけて長く突出した能登半島の「かたち」は、こうして大陸から見てみるといっそう際立ち、そして実に魅力的である。我々は通常、北方を上にした日本列島の地図を、それも広大な太平洋を介してアメリカ合衆国へ如何にも開かれたような日本列島の容姿を何ら疑わず眺めているが、この下図のようにそれを逆にとすると、全く違う島々を見るような新鮮な印象を受けるのではないだろうか。しかしここから窺える列島のありようこそが、歴史的に捉えた日本の実像だったと思われる。少なくとも古代日本はそうだった。古代の日本が、海を隔てて交流をもったのは、太平洋を隔てた遙か遠い異国の土地では決してなく、日本海をめぐる朝鮮半島とその背後の中国大陆だったのだから。そしてこの古代の環日本海交流の主な表舞台の一つが、地理的にみて日本海沿岸域の中央に位置する能登半島一帯であったわけである。

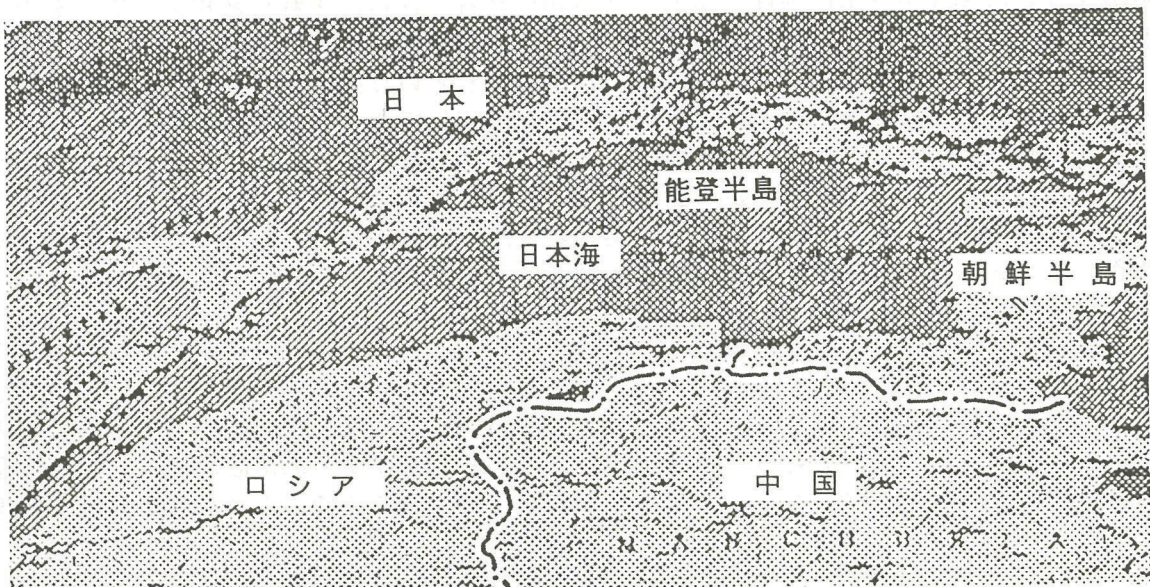


図 - 1) 宇宙衛生が撮らえた日本海と弧状列島の日本



こうした能登の地理的条件について、まずその北端とは、ほぼ北緯37度（新潟と柏崎の中間にあたる）に位置する半島先端部の珠洲岬ではなく、実は北岸よりさらに北方50km沖合にある舩倉島なのであり、それは厳しい日本海のなかに投げ出された小さな孤島である。また北岸から北西岸にかけては急な岩壁を擁しており、猿山付近では200mに達する絶壁海岸となり、荒波が激しく叩きつけている。それとは全く対照的に東岸は、緩やかな海岸にのどかな波が静かに打ち寄せている。この対照的な能登の自然風景について、前者の荒々しい様相を「外浦」、後者の温和な様相を「内浦」と区別して呼ばれている。また西岸南方一帯は、長く美しい砂丘が続いている。このような半島をめぐる500kmもの海岸線に見られる自然風景は実に変化に富み、景勝地も少なくない。こうした地理的にも複雑な上に、かつ日本海に長く突き出た能登半島の沖合では、南下するリマン寒流と北上する対馬暖流がちょうど混流することが気候・風土を形成することに大きく作用して、独特な植物群落をはじめとする自然環境を生み出し、さらに固有な歴史や民俗、文化を育み、ここに生きる人間の営みに大きな影響を齎してきたわけである。

また日本列島の古代文化が、日本海を隔てた東アジア大陸やその諸地域からの渡来文化をその母体として形成されたことに疑う余地はなかろう<sup>5)</sup>。ただこの渡来文化の主たる交信役が、中央畿内政権の遣唐使のみと見做す従来の見解については、既に幾多の論議を経て、現在見直されつつある。つまり中央からの遣唐使は、わずか15回の一方通行にすぎなかったものの、それとは対照的に、日本海沿岸の主体性ある地域の民衆と対岸の渤海からの客人（まれびと）との交流は、来国35回、遣使14回にも及んでいた。この上さらに新羅との頻繁な交流も加わる。従って日本海沿岸の山陰や北陸の地域とは、畿内からの遣唐使の単なる通過

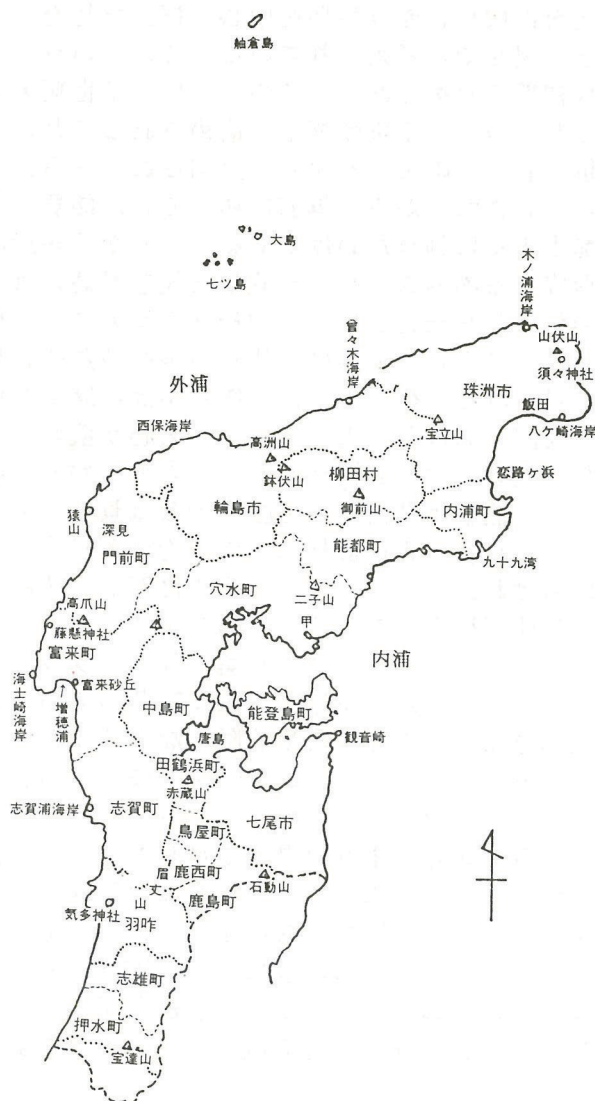


図 - 2) 能登半島の自然環境に関する地名図



門前町深見より猿山遠望（撮影 小牧旌）



点にすぎなかったわけでは決してない。中央政権の全支配下に対岸交流が組み込まれる前にも後にも、日本海沿岸域に生きる人びとは、主体的に対岸との独自の交流を結んで渡来文化を摂取し、能登半島を中心に据えた特有の「コシ（越、高志）文化圏」を形成していたと、現在では考えられている。ここにいう「コシ」とは、今日のほぼ北陸地域をめぐる古代初期の呼称である。このコシに、7世紀末の律令体制確立にともなう国郡制が施行されると、つまり中央政権下に治められることによって畿内に近いほうから順に「越前」・「越中」・「越後」と命名・分国され、さらに8世紀以降には紆余曲折した政治情勢の趨勢に左右されながら、越前に属していた能登半島一帯が分離して「能登国」と「加賀国」が誕生するに到ったわけである。ともかく対岸の渡来文化によって独特な「コシ文化圏」を形成する圏内の中心に位置した能登半島にはまた、土着の自然信仰と対岸から伝わる異国の信仰とが融合して、「韓神（カラカミ）信仰」という得意な信仰形態をもつくりだしていた。こうした模様は、能登各地の遺跡や古墳、神社の祭祀儀礼などに明確に現在でもなお見られる。従って古代の能登半島に歴史的風土が形成される下地には、遙か日本海対岸の異国へ向けた土着の生きた崇敬心が濃厚であり、そこから能登沿岸の風景には、こうした土地固有な空間構造を有した場所の性格が読み取れるように考えられるわけである。

さらに能登半島沿岸域の歴史的な風景を考える場合のいま一つ別の視点として、現在海岸沿いに点在する社叢林などの植物群落構成に着目することは有意義であろう<sup>6)</sup>。そこで先にも触れたように、半島沖合では寒流と暖流が混流することから、気温をはじめとする気候条件が複雑となって、植物の生態に大きく反映する。まず現存植生からみた古代の原植生については、暖地性の照葉樹林（スダジイ、タブノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、モチノキなど）が、海岸線に広く繁茂していたと考えられている。また半島一帯に、全国の植物分布からみて南限や北限となる希少な海浜植物（アカネムグラ、イワダイゲキ、ウミヒルモ、ウミミドリ、エゾヒナノウスツボ、オオクグ、ギョウジャニンニク、コモチシダ、シバナ、センダイハギ、ハマトクサ、ハマベンケイソウ、ハマナデシコ、ヒゲスゲ、ヒトモトススキ、ホクロクトウヒレンなど）が観察され、これは海岸の植物生態を知る上で重要である。このように能登半島の気候的・地理的条件に結びついて成立した特徴ある植生、概して照葉樹林と海浜植物によって構成された植物相ないし林相が、沿岸域の歴史的につくられた風景の現象に大きく寄与してきたであろうと考えられるわけである。

よって以上のことを踏まえて、能登半島の風景を、その「風土」と「植生」の特質に留意して、それぞれ「海辺の風景」と「木立の風景」とに分けて考察をすすめたい。



ハマナデシコ フジナデシコ  
ナデシコ科。中形多年草。花は7～9月（紅紫）。花弁のへりに歯牙があり、細く裂けない。葉は肉質で光沢がある。磯浜に生え、少ない。



ヒトモトススキ カヤツリグサ科  
大形多年草。花は7～8月（濃褐色）。全体大形で強剛。葉は著しくざらつく。海岸の湿った所に生え、少ない。

能登半島の希少な海浜植物



ホクロクトウヒレン ホクリクトウヒレン  
キク科。中～やや大形の多年草。花は9～10月（紫紅）。頭花は外形アザミ類に似る。茎と葉柄に広い翼がある。能登の海岸林下に生え、少ない。



## 2.-2) 白砂青松——海辺の風景

能登の歴史的風土や信仰、民俗などの形成に、日本海を隔てた対岸より来たる客人との交流の齎らす渡来文化が、大きく関与していることは既に若干触れた。そうした能登の人たちが、こころの中に刻み込み大切に保持してきた「原風景」の一つは、紛れもなく「海辺の風景」であつたと思われる。ゆえに能登に生きる人間にとって、海辺という場所とは、対岸の異国からの客人を迎える交流の場であり、また対岸の異国へ向けて想いを馳せて祈る信仰の場であり、さらに日本海の自然の恵みが打ち上げられる生活の場であつた。さらに日本海の荒々しい波濤と海岸を覆う白砂の静けさとの対比的な光景が、何とも言えぬ神秘的な美しさを漂わして、いつそうこの土地に生きる人びとのこころを引き寄せたのではないだろうか。そしてこのような海辺の風景に特別な想いを寄せるのは、能登の人びとをはじめ、全面を海に囲まれた列島日本の沿岸地域に生きる人びともまた、自ずと抱かざるを得ない「原風景」であつたのではなからうか。日本各地の名勝地が、殊のほか海辺に多いことから、日本特有の風土性に深く関わるものであることは明らかであろう。さらに美しい海辺の風景を称賛して、それを表象することばに「白砂青松」が好んで使われてきたことがここで思い寄せられる<sup>7)</sup>。そこから思い浮かぶのは、波打ち際に沿って続く真っ白な砂浜と、それに並行して生える黒松の並木であり、このモノクロのコントラストに映える単純な美の光景こそが、日本海沿岸の各地に見ることのできる風景の原型のようなものである。そしてこのような海辺の風景の美しさはまた、昔話として伝承されてきた「羽衣伝説」や「浦島太郎物語」の情景に神秘的で高貴な彩りを限りなく与えてきたことから、海辺の風景は日本人のこころにいつまでも温かく親しまれながら、そして人間の生きる世界を支える広大無辺な彼方へと開かれているのである。

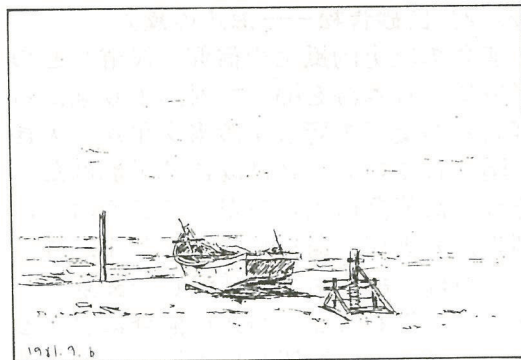


図 - 3) 記念碑「白砂青松」(西田幾多郎筆)  
西田記念館、石川県宇ノ気町



図 - 4) 日本海に沿って北にのびる  
能登千里浜の海辺の風景





能登の海辺の風景（スケッチ 小牧旌）

ここで、こうした能登の海辺の風景を繊細に描写した、哲学者西谷啓治の随想「奥能登の風光」から引用してみたい。奥能登の静寂な海辺の広がる内浦の漁村に育った西谷は、幼年の頃を振り返って、古くからの伝説で知られる「恋路ヶ浜」での美しい思い出を、神聖な雰囲気と淡い情緒の滲み出てくるような行間によって、このように書いている。

飯田に行く街道は、家の前を通っていた。道の片側はすぐ砂浜で、その浜は飯田の方までずっと続き、反対の方向は、伝説で名高い恋路の浜に続いていた。浜の向こうには静かな海が開け、遠くに水平線が見えた。

浜は広々として、とても清らかな感じだった。人気もなかったが、それ以上に、人間臭さの全くない、古い言葉でいえば「俗塵」から抜け出たような、澄んだ清らかさを感じられた。その浜には桜貝が沢山あるので、私も拾いにつれて行かれた。桜貝は、その透き通るような薄い殻が淡紅色に染まっていて、紅玉のように美しく、しかも宝石の堅さをもたぬ、非常に華奢な小貝である。砂の上にあっても、どこことなく地上のものではないような気高い清らかさがる。砂浜自身澄んだ清らかさも、同じ様に、何となく地上のものではないような一種の感じを含んでいたのである。そういう砂浜のイメージ、また自分がそこで桜貝を拾ったことの思い出は、幼ない心の底に深く刻まれて残った。<sup>8)</sup>

ある一つの風景との深い体験から得て綴られた文章には、単なる随想以上の内容が語られている。この恋路ヶ浜にて見られた原型的な風景と人間とのかかわりには、まさにこの特定の場所のもつ空間構造がはっきりと写し出され、読み込まれている。さらにこれを古代日本人が好んだ風景の典型として深く把握してゆく西谷は、この文章に続けてその場所の性格を鋭く指摘するのだった。つまり「昔の日本人が特別に好い景色として選んだ所、或いは歌枕と称して賞でた所は、どこか地上のものならぬ、その意味で幽玄ということにも通じるような、深い清澄の感じを喚び起す場所だったのではないか。それが自然美に対する昔の日本人の感覚、古代から続いていた感覚だったのではないか。」<sup>9)</sup>と。能登のある一つの海辺の風景、その深い清澄さを感じさせた砂浜に見られた風景とは、人間の存在を拒むようでありながら完全に隔離された処ではなく、むしろ人間の世界を根底から支え、大きく包み込んでいるような、限りのない開けに繋がる場所なのであり、そしてはっきりと風景と人間存在の空間構造が見い出されている。常に自己の位置を定位として、空間を分節し構造化して生きる我々人間は、周囲の外界との間に秩序化された新しいかかわりを結び続けながら、そのかかわりあいにおいて風景は現われる。つまりこのように人間の主



ここでこのような常緑の照葉樹林より見た能登半島の歴史的風景を、それもタブノキに着目して考察を具体的にすすめるために、それを詠んだ一つの和歌を次に引用したい。

天平20年(748)の春、ときに能登を併合していた越中の国守であり歌人の大伴家持は、能登半島を巡行した際に詠んだ歌五首を『万葉集』に残した。そのうちの一首に、「能登郡の香島の津より発船して、熊来村を指して往く時に作る歌」と題した、

鳥総立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ

という旋頭歌(五七七五七七形式の歌)が知られている。これは、「鳥総(木の末や枝葉の茂った先)を立てて山の神に供えながら、船材を伐り出すという、能登の島山に来てみれば、生い繁った木立が幾世代もへて、神々しいばかりだ」といった意味であろう。家持が眺めた八世紀の能登の山々は、遡って七世紀より、畿内政権が北方進出のための造船基地として指定されていたのである。それは、その名残りである能登の「舟木部」の名が、平城京出土の木簡や、正倉院の宝物に用いられた「あしぎぬ」の墨書にとどめられていることから確認されている<sup>12)</sup>。ここに言う船材には、クスノキ科のタブノキあるいはクスノキが使われていたであろうと、現在の考古学の発掘遺物をもとに考えられている。ともかく家持は、船材の森林資源として指定されていた能登の山々を訪ね眺めて、その神々しく繁茂したタブノキなどの常緑の照葉樹による独特な木立の風景の美しさに触れることによって、この土地の生活や風土、信仰の歴史的厚みを支える何か神秘的なものに、深い感動をもって詠んだのであらうと思われる。

このような大伴家持の歌に詠まれていた、能登の山々や海岸線に沿って見られた神々しいばかりのタブノキの木立の風景とは、単に船材といった実用的な価値から眺められたものではなく、遙か人知を超え出たところへと開かれる風景の現象であつたと言えよう。土地に生きる人びとの営為と場所とのかかわりや、その相互の支え合うありかたが、風景をつくりだし、あるいはそこに写し出され、また風景そのものに生かされるのであらう。この木立の風景において、能登に生き住む人間のいのちは支えられながらも、そこにはあらゆる万物を大きく包み込む彼方へと繋がっている<sup>13)</sup>。それはまさに、先の白砂青松で見た海辺の風景に現われていた深い清澄さを漂わせた空間の構造がもつ特質、つまり風景なるものの性格としての「風景の品格」に通じている。海辺の風景にみた日本人の自然美の感覚は、ここでの木立の風景あるいはタブノキという巨樹の存在がもつ雰囲気に対するものと同質なのである。古代という古き時代



タブノキの社叢林(撮影 小牧旌)



タブノキの巨樹(撮影 小牧旌)



体的な働きかけに応じて生み出される風景について、人が真に人でありえたとき、自己が真に自己でありえたときにこそ、風景も真に現われると言えるのではないか。そしてこのときにこそ風景は、人知を超えた何か広大な世界を開かしめるものなのであろう。さらに言及するなら、こうして現われた風景なるものには、人間の生きる深みを湛えた風格のごとき「風景の品格」が備わっているように思われる。上でみた能登の海辺の風景に感じられた、あの神秘的な清澄さとは、まさにこのような風景の品格として捉えられる。

### 2.-3) 古木への崇敬——木立ちの風景

能登半島の風景を考察するいま一つの見方として、ここでは海辺に繁茂する植生に着目して、その林相がつくりだす木立の風景について考えたい。

そこで確認のためにも再度重ねて言及すると、日本海に長く突出した能登半島沖合においてリマン寒流と対馬暖流とが混じり合うことや冬季の積雪などの気候的な要因、さらに半島の地理的な要因などが大きく作用し合って、能登各地には分布的に北限や南限とする希少な海浜植物が数多く観察され、また南方系の暖地性樹種より構成される常緑の照葉樹林が沿岸一帯を覆い、その独特な植生の林冠から見ても、日本海沿岸に実に相応しい風景が生み出されているのである<sup>10)</sup>。また照葉樹林は一般的に、その林冠を構成する樹種の枝葉が密で、しかもそれぞれの葉が落葉広葉樹よりも圧倒的に厚く落葉しないため、その林床は年中暗い空間となってしまう。暗湿な林床の空間には、耐陰性の強い植物しか生育できないので、構成種はかなり限定されるため、落葉広葉樹林の林内のような雑多な様相にはならない。さらにそのおかげで照葉樹林とは、落葉広葉樹林よりも植生遷移が比較的単純でかつ安定化することから極相林をつくるために、今日のように各地で社叢林として保持されることにもなったわけである。また、照葉樹林の林冠構成種が落葉広葉樹よりも少ないことは、林相に最も大きく反映し、さらに美しい風景の現象にも寄与しているのである。こうした照葉樹林には、スダジイやタブノキ、ヤブツバキなどが主であるが、そのなかでも殊にここで注目されるのは、クスノキ科のタブノキである。

照葉樹林を構成する樹種のなかでもタブノキとは、最も太い樹幹を有する巨樹となるため、一際目立つ存在である。また如何にも風雪に強く耐えて生きぬいているような厳しい趣を見せて、冬季にも落葉しない光沢のある厚い葉をこんもりと繁らせた大きな樹冠や樹形、さらに粗く深い刻みが入る木肌と瘤状の凹凸の激しい樹幹から漂う神々しい樹相に、人間の深い崇敬心が古くから寄せられた。また良質の船材や生活資材などに利用されることもあって、いっそう尊重され大切に守られてきたのである<sup>11)</sup>。



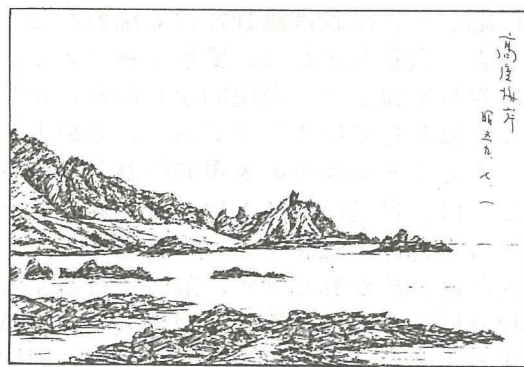
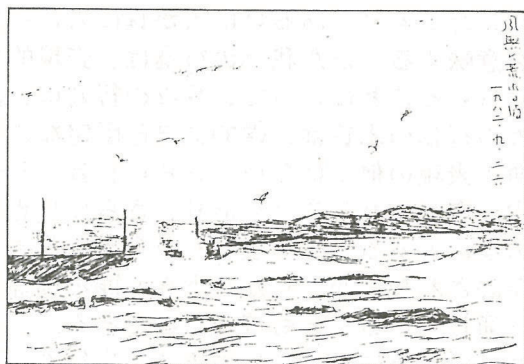
タブノキ イヌグス

クスノキ科

常緑高木。花は6月（黄緑）。果実は藍黒色。葉は厚く、硬く、表面は光沢があり、裏面は白っぽい。海に近い土壌の深い所に生え、社叢・寺院・民家付近に老木が残されて、原生林の名残を留めている。

照葉樹林の代表樹種 タブノキ





能登の海辺の風景（スケッチ 小牧旌）

から日本人が、木立の独特な存在感あるいはその風貌に不思議な魅力を感じてきたのは確かである<sup>14)</sup>。ほぼ百年にも満たぬ一人の人間のいのちに比べ、数百年という長い年月を生き続け、平然として佇む一つの巨樹の姿に、すさまじいばかりの原始的で神秘的ないのちの躍動を感じるからなのであろうか。またずっと同じ場所に不動として立ち尽くす巨樹は、変転と移りゆく歴史をじっと見つめてきた存在でもあるからだろうか。こうしたことを抛り所にして、巨樹にはいろいろな伝承や物語が託され、あるいは同地に生きる人びとの日々の崇敬心を刷り込んできたのであろうとも思われる。このように大伴家持の詠んだ歌を素材にしてみてきた、巨樹の漂わす存在感や木立の風景に、人間と風景の深い意義が認められたのである。

### 3. むすび——風景の品格<sup>15)</sup>

能登半島における「海辺の風景」と「木立の風景」という捉え方に基づいて、「風景なるもの」の性格について考察してきたわけである。そこから人間と空間、場所との構造や風景の現象、さらに風景の品格についていくぶん明らかにされてきたように思われる。

風景とは、人間の生きることと無関係にして存在するのでは決してない。人間の実存的なあり方やその意義と深くかかわりながら、風景は現象する。

我々人間は、常にして自己の位置を定位とし、そこから始まる空間（場所）を分節することで秩序化・構造化して、そのうえ外界の事象と複雑にかかわりを持ちながら、この限られた世界に生きる（住む）ものなのである。人が大地に於かれてあるということは、単に物体が存在するのとは全く意味が異なる。人間はこうした生の営みを無自覚的にも日々のなかで続けることで周囲と新たな関係を結びつけ、常にして世界とのあいだには開かれた関係を維持してゆくのである。人がこの大地に主体的に生きて住まうことによって、はじめて外界は秩序化され構造化されることと伴に、さまざまな境界が設定されてくる。そしてその境界の現象に於いてこそ、風景なるものが写し込まれ、創造されていく。従って先に能登の風土や植生において確認されたように、このような日常世界に於かれた人間存在の生の営みと、さまざまな土地の歴史や風土、信仰、文化、自然、地形などの場所の構造とのかかわりが、風景の現象のなかに表現されるのである。

また風景は主体のあり方によってさまざまに現象するものでもあり、人間にとって単なる対象物でもなければ、即自存在でもない。他の自然界の生物にとってではなく、人間にとって初めて、また人間が存在して初めてものがものになり、風景が風景になる。人間が生きる（住まう）ことによって風景は開示されるのである。我々にとって風景は生きることそのものであり、生きるとは我々そのものである。このときにこそ見えてくる風景は同時に見る人の眼や容姿を映し出すのである。それはつまり、人間の生きるそのことの意



味に応じて、風景は風景として現われるということであり、あるいは人が真に人としてあるとき、風景もまた真に風景でありえることを意味する。また我々の行為は、表現的なものに対して起こり、表現的なものから呼びかけられることによって、我々の行為は、表現的な行為として始まるのである。その上、我々の行為の本質は、端的に自己限定なのである。そしてその我々の表現的行為とは内的生命の表現の他ではない。さらに行為するということは、自己の意識を超えた外界を自己の中へ取り入れることであり、さらに外界との出来事を自己の意志でもって自己表現するものなのである。この限られた世界に生きる我々人間は、於かれた世界に限って行為するしか許されないが、しかし世界と開示関係をもつ我々にとって、世界を包む広大無辺な彼方へ通じていることも確かなのである。

我々人間が、自己の於かれた場所に限定されつつ、真に人として誠実に表現行為し、深く生きられることに限って、その人の容姿には、限りのない世界から照らされたある確かな風格が滲み出てくる。この事態に相即して、その主体に見られた風景にはある品位が生起している。風景の品格とは、風景なるものの根底にあるものであり、無限な彼方を背景にしたものである。それはまた、先に能登の海辺の風景や木立の風景に見られたような、人間の生臭いものとはどこか異質で、何か神秘的な清澄さを漂わせた風景なのであり、人知を超え出た広大な無の世界に開かれ通じてゆく処なのである。人間の風格と風景の品位とは、相互の呼びかけへの呼応そのもののかかわりのように思われてならない。我々人間は深く生きるということの他に、風景が風景として現象しないだけでなく、確かな方途すらも開かれぬ。風景の品位はさらにその彼方に開かれる。

#### 〔追 記〕

本文において、挿図一つ一つの説明を敢えて入れず省略しましたが、考察内容に沿って参考までにご覧いただければ幸いです。

#### 〔謝 辞〕

いまだ筆者にとって決して忘れることのできない、お二人の先生について触れたい。高専生だった頃より、公私ともにお世話になって日々勇気づけてくださった亡き浅香年木先生と、なお幸いにしてお健勝の小牧 旌先生からの温かい学恩に報いたいという思いで、地域史学と植物生態学からみた能登半島の風景論への未熟な考察を、本稿にて取り組んでみました。ふたたび両先生のお仕事を振り返るなかで、拙い筆者の浅学と怠惰さに恥じ入るばかりでした。これからも「能登半島の風景」の建築論的考察は続けていきたい。

個人的な感慨を最後に書き留めましたことをどうかお許しください。

#### 【 註 】

- 1) 「風土」に対応する英語は、本来「気候」という意味の「climate」が、一般の辞書では当てられている。しかしそれには、「風土」という日本語の包括的な意味やニュアンスとはかなりの格差が認められ、欧米語には訳しにくい概念であることが明確なようである。例えば、現代フランスの著名な日本風土研究者オギュスタン・ベルクは、「風土」に対して「中間、環境」を意味するフランス語の「Milieu」を敢えて使い、さらに日本の風土の特質を根拠にフランス語への翻訳語として、「風土性」を意味する新造語として「Médiancé」なる概念を提示しているのである（ベルク『風土の日本』ちくま学芸文庫 1992）。また和辻哲郎の名著『風土』（1935）の独訳書のタイトルには、そのまま「Fudo」とした上で、サブタイトルに「風と大地——気候と文化の関係」と添えられている（T. Watsuji, Fudo - Wind und Erde, Der Zusammenhang Zwischen Klima und Klutur, Darmstadt 1992）。ともかく、このような「風土」という概念については未だ検討する余地が残されているようであるが、ここでは保留としておき、本稿の英語タイトルでは、取り敢えず「風土」をそのまま「Fudo」としておくことにする。



- 2) 本稿の全体的な骨格ないし考察のすすめかたについては、次の文献から多大な示唆をえた。  
香西克彦『「風景なるもの」について——建築論からの考察』（京都大学大学院人間・環境学研究科学位論文 1997）を参照されたい。
- 3) 近代建築の空間論から場所論への展開についての概要は、前川道郎「〈場所〉ということ」（同編『建築的場所論の研究』中央公論美術出版 1998 所収）に詳しい。
- 4) この表現は、足利ほか『歴史がつくった景観』古今書院 1982 に基づく。
- 5) 日本海文化の捉え方については、浅香年木『北陸の風土と歴史』山川出版社 1977 並びに同『古代地域史の研究——北陸の古代と中世 1』法政大学出版局 1978、さらに同『茜さす日本海文化』能登印刷出版部 1989 に拠っている。
- 6) 能登半島の植物・植生については、小牧 旌『図鑑能登の植物』同刊行会 1976 並びに同『加賀能登の植物図譜』同刊行会 1987、そして同「能登半島海岸植物研究」の成果に拠っている。また日本全域の植生については、宮脇昭編『日本の植生』学研 1977 を参照した。  
なお以前に能登の海岸植物の特性や加賀・能登の植生比較について、現地の調査研究をもとに考察したことがある。詳しいことは、拙稿「机島の植物」『石川考古学研究会会誌』第33号 p124-129, 1988、並びに報告書『台ノ峰の植物』私家版 1989 などを参照していただきたい。
- 7) 日本の風景特有なことばに、このほか「山紫水明」「蔵風得水」「溪聲山色」などが知られている。また「白砂青松」については、只木良也「白砂青松 美保の松原」（菅原聰編『森林 日本文化としての』他人書館1996）を参照した。これらの風景用語についても別稿にて考察したい。
- 8) 西谷啓治『宗教と非宗教の間』岩波書店 p209, 1996
- 9) 上掲書 p210 西谷にはこのほか「空と即」など、建築論ないし風景論に示唆深い論文がある。
- 10) このような常緑照葉樹林に対して、二次的な植生としての里山にみる雑木林や、あるいは高山帯に広がるブナ林など、日本列島全域にはさまざまな特徴を有する森林相が見受けられる。そしてそれぞれに対応した人間との関わりを生み出し、それぞれに相応しい風景を構成してきた。常緑照葉樹林は現在社叢林に見られるように、また雑木林は人間生活の延長上に見られるように、さらに人間生活と日常隔離されたブナ林は奥山の修験道に見られるように、それぞれのつくりだす風景の現象とその意味は独特である。雑木林やブナ林を対象にした風景論的考察については、別稿で取り上げたい。  
森林とは、従来経済的な価値を中心に認識されてきたのであるが、近年は文化（史）的な意義が目まれ始め、また美学的、思想的な考察も多くなってきている。例えば「森林美学」という概念を初めて使い始めたのは、十九世紀後半ドイツの林学者ザーリッシュ(Heinrich von Salisch 1846 - 1920)であった。このザーリッシュの森林美学思想は、いち早く日本にも取り入れられ、北海道帝国大学農学部などを中心に広がった。この森林美学思想についての考察は、庭園ないし造園学や建築学、土木工学とも関連深く、また風景論にも示唆が多いので、ぜひ別稿で取り上げたい。
- 11) そのほかここでは触れられなかったが、能登半島におけるタブノキの民俗学的重要性については、小林忠雄「能登の漂着文化と民俗——タブの木伝承における南方系要素」（『月刊歴史手帖』11巻5号、特集・能登地方の渡来文化 1983）を参照されたい。
- 12) この家持の和歌について、その能登の古代地域史からみた解釈は、浅香年木前掲書に拠っている。
- 13) 田中喬「木の魅力と人間」（『田中喬講演集 人間と建築』私家版 1994）から深い示唆を得た。
- 14) 巨樹の魅力については、牧野和春『巨樹と日本人』中公新書 1998 を参照した。
- 15) 「風景の品格」については、中村良夫『風景学入門』中公新書 1982 から大きな教示を得た。

【図版出典】

- 1), 4) 浅香年木『茜さす日本海文化』能登印刷出版部 p13, p69, 1989
- 2) 『能登の文化財』第11輯（自然特集号）能登文化財保護連絡協議会 1976
- 3) 上田閑照『西田幾多郎』岩波書店 p40, 1995

なお植物図とスケッチはすべて、小牧旌『加賀能登の植物図譜』同刊行会 1987 と『能登 自然を歩く』七尾市図書館友の会 1990 よりそれぞれ転載させていただきました。